

大隈言道研究 VIII

『草径集』 箋註 (1)

進藤 康子

要約

江戸時代後期の博多の歌人、大隈言道研究第八部。

『草径集』は、言道が大坂(大阪)にて、数万首の歌の中から九七一首選び出し、版下も自分で書き、出版した家集である。百部限りで出版したが、故郷の弟子、野村望東尼に手紙で売り捌きをたのむなど、苦難は続いた。福岡の飯塚に住む小林重治も多くの資金調達を請け負ったと思われる。家集『草径集』九七一首の一首ずつに、和訳と、新たな箋註を付す。

キーワード：大隈言道、草径集、萍堂、ささのや

はじめに

『草径集』は、大隈言道の三巻三冊から成る家集である。福岡で活動しながら日常生活の機微を捉え、ささやかな感動に目を止め、斬新な発想で、口語や俗語を交えながら独自の歌風を築いた言道であったが、六十歳にして大坂(大阪)に上り、上梓するために、中之島に寓居し、持参してきた今までの年々の歌集数万首の中から、九七一首を選び出して上中下の三冊にまとめた。配列は、四季の歌

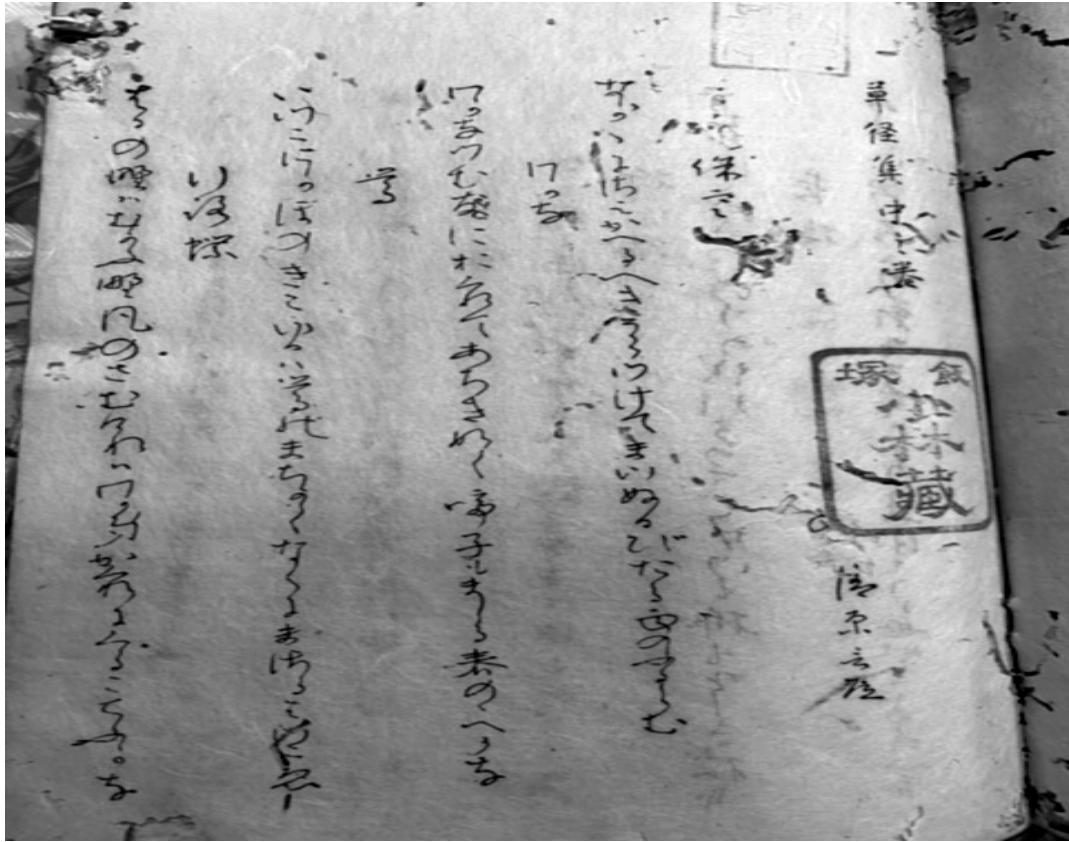
の間に雑歌を置き、歌が隣の歌とそれぞれ呼応しあうようにと配慮している。「隣のうたより隣に、にほひあひ照らし合ひて、其集めづらしく、めでたくなるべけれ」『ひとりごち』とあるように、隣あう句が響きあい更に趣き深くなるようにとの思い入れがあった。

自ら版下を書き、文久三年癸亥正月自序。茂邨恒久跋。同三年三月に刊行した。(但し、『享保以後大坂出版書籍目録』では、「文久四年二月、大坂河内屋宗兵衛刊」とある。作者、蔵版主名は、天満十一丁目の大隈屋言道。売り払い人は、河内屋宗兵衛。出願は、文久三年三月。許可は、文久四年正月二十八日。そして、同二月に三都で出版の運びとなった)

百部限定で出版したのだが、大坂では知り合いも少なく販路も乏しい。故郷の弟子、野村望東尼に手紙で売り捌きを頼むなど、苦難は続いた。また、福岡の飯塚に住む造り酒屋の主人、小林重治も協力を惜しまなかった。重治は、言道の弟子の一人であり、かつ、最大の支援者で、資金の調達から売り捌きまで多くを請け負ったと思われる。)

今回、底本に用いる架蔵本『草径集』には「飯塚 小林蔵」の蔵書印がある。奇しくも、小林重治が最後まで手元に置いていたものであろう『草径集』であることが新たにわかった。(資料(一) 参照)

この家集『草径集』九七一首の一首ずつすべてに、初出と新たな箋註および現代語訳を付し、言道和歌の解釈の一助としたい。)



資料(一) 「飯塚 小林蔵」蔵書印(架蔵本)

解題

○書誌

『草径集』三卷。三冊。それぞれの表紙に、題簽が「草径集上」「草径集 中」「草径集 下」とある。

九七一首。半紙本。楮紙。^{三)}

縦 二十二・五センチ 横 十六センチ

蔵書印「飯塚 小林蔵」 縦 四・四センチ 横 三・一センチ

草径集下の最終丁の記載「池萍堂蔵板之章」の上段に

「池萍堂記」の印 縦 二・四センチ 横 二・四センチ

(資料(一) 参照)

※大阪府立大学学術情報センター蔵本(旧大阪女子大学付属図書館蔵本)は、同版であるが、草径集下の最終丁には、枠の

□のみで、「池萍堂記」の押印は無い。

(序)

文久三年亥正月二十日 自記 大隈言道

(奥付)

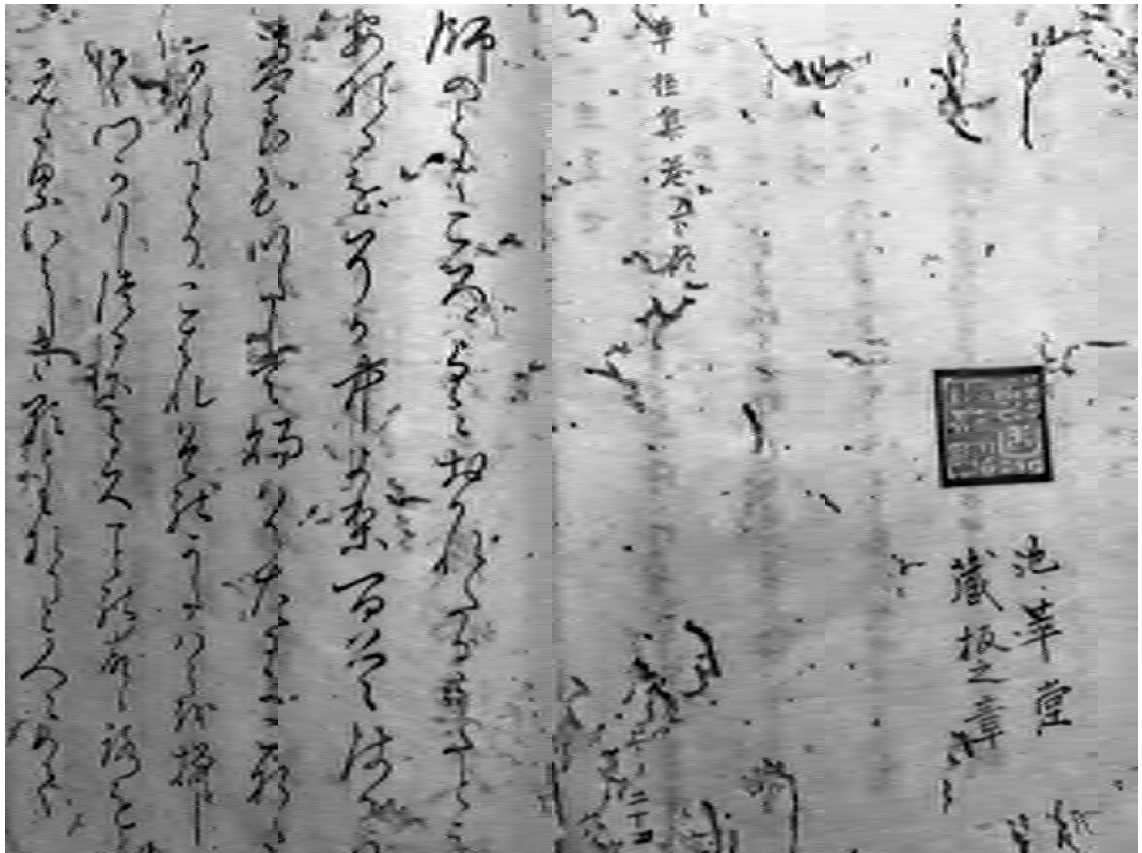
文久三癸亥三月

三都 京三条通 吉野家甚兵衛

江戸日本橋 山城屋佐兵衛

大阪心斎橋通 河内屋喜兵衛

書誌 同 宗兵衛



資料① 「池萍堂記」印 (架蔵本)

○凡例

底本は、文久三年（一八六三）刊行の版本（架蔵本）を用いた。すべての歌に現代語訳を付した。

版下は言道自筆。

翻刻にあたり、ほぼ定本通りに近づけるように翻字した。一部、歌意が通るように変更した。

濁点は便宜上施したところがある。

反復記号は、ほぼ底本通りとした。

和歌のはじめに歌本号を付した。

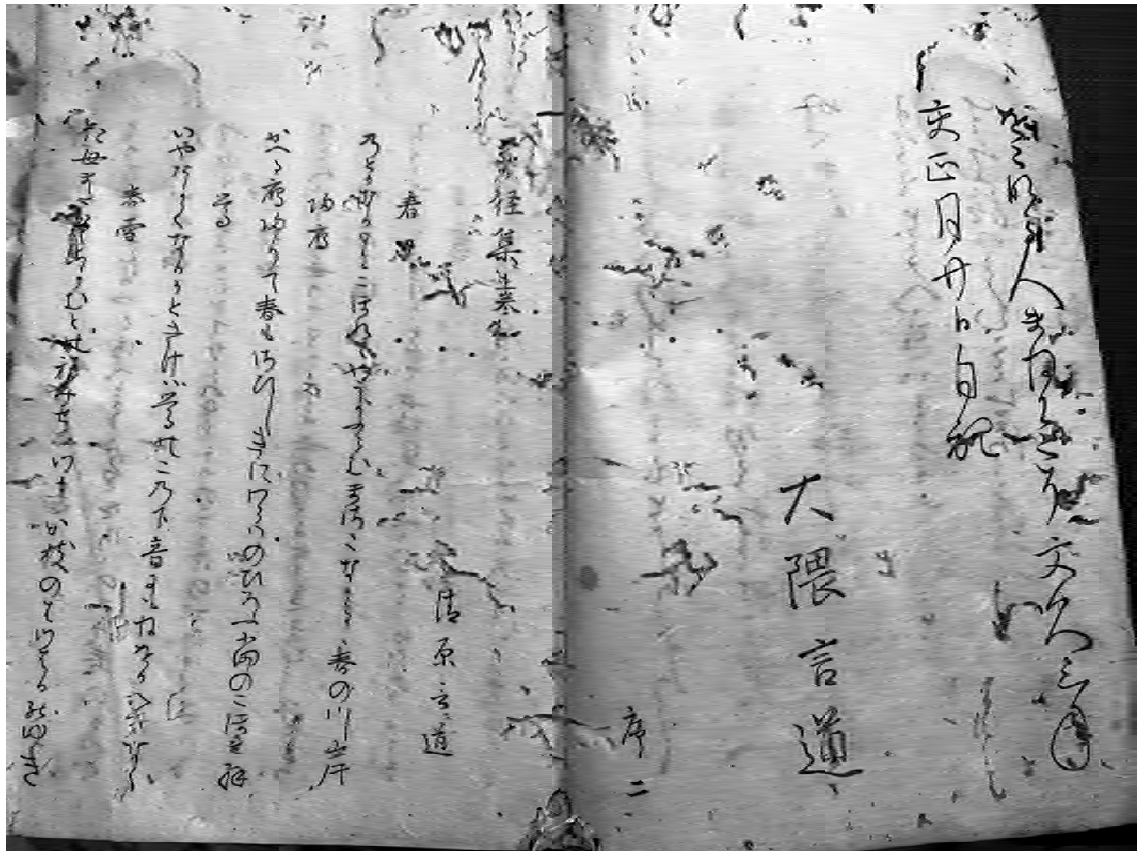
題の表記は底本のままとした。

歴史的仮名遣いは定本どおり用いている。

読みやすいように、一句一句に、間をあけた。

『草径集』成稿前に編まれた年々の歌集『甲辰集』『己酉集』『庚戌集』『辛亥集』『今橋集』などに初出の歌が見いだされる場合、歌集名を明記した。

また、一首一首の歌の異同、添削などもそれぞれの歌集により、推敲の過程がわかるように詳細に記載した。言道による傍書の加筆も同様に明記した。



資料③ 『草徑集』 序「亥正月二十日自記 大隈言道」(架蔵本)

序

(四)

おのれ (1) わかよりし時より よみおけるうたどもを こた

び (2) いたにありなむとするに おのれが (3) つくしには

いとうた人おほく そのなかには すぐれたる人も すくなからぬ

を (4) あながちに よそに しられむのころなくて (5)

いたになどものする人すくなし

ざるを おのれ ちかごろ この (6) なにはにきたりて

(7) こゝの友達 歌集などものする 序

おのれもまた (8) せまほしくなりて (9) かくみだりがはし

く (10) かいつめたれど

もとより よろしきうた あるべうもおぼえねど

世のうしがた まれにも (11) 目とらめ給ふがあらば 一歌に

ても とるべきはとり すつべきはすて給はらむことを いまさら

いふべきにあらず

(12) をこなる人まねにこそ

(13) 文久三年亥正月二十日 (14) 自記

大隈言道

【語釈・解説】

(1) わかよりし時

言道は、七く八歳(文化元年)の頃より、筑前の書家二川相近に師事し、書と歌を学んだ。相近は、明和六年(一七七六)く天保七年(一八三六)没、七十歳。福岡藩士。御料理人。亀井南冥に師事、甘棠館に学ぶ。書家として二川

流を創始。青柳種信に国学を学び、今様の大家であった。相近の弟子石松元啓編『山里和歌集』(九州大学蔵)には、言道の若き歌が入集しており初期の歌風を知ることができ。しかし、言道は天保三年ごろから、今までの歌を古え風のものまね歌「木偶歌」(人形)と称して捨て去り、これ以後、独自のつぶやくような、自然体の歌風を模索して行く。^{四)}

『草径集』は、言道のいわゆる「覚醒」以後の歌稿から採集されている。

(2) いたにゑりなむとするに

板に彫り。上梓、出版しようとする。

(3) つくし

筑紫。筑前、筑後の称。現在の福岡県辺り

(4) あながちに よそに しられむのころなくて

強いておのれの名声を世にひろめたいという気持ちもな

(5) いたになどものする

板に歌を彫りつけること。出版すること。

(6) なにはにきたりて

難波。大坂(大阪)にやってくる。

安政四年(一八五七)、言道が六十歳の折に上坂した。

(7) こゝの友達歌集などものする

ここの友達が歌集などを出版する。

佐佐木弘綱が『千舟集』を、加納諸平が『鯉玉集』を、長沢伴雄が『鴨川集』を、中島広足が『檀園集』などの歌集を、荻原広道は『源氏物語評釈』を上梓するなど、言道をとりまく友人知人たちがこのころ次々に出版していった。

(8) せまほしくなりて

自分も歌集を出版したくなって

(9) かくみだりがはしく

手当たり次第にむやみやたらに。

(10) かいつめたれど

書き集めたけれど

(11) 目とどめ給ふ

良い歌だと注目してくださる。

(12) をこなる

馬鹿げた。自分が歌集を出版することは物笑いとなるよう

な馬鹿げたことなのだ謙遜している。

(13) 文久三年亥正月二十日

干支は癸亥。一八六三年、言道六十六歳

(14) 自記

自序の事。

草径集の版下は言道自筆。言道は、釈幽真『空谷伝声集』(慶応二年刊)の版下も書いている。

(資料三) 参照

草徑集 上巻

清原言道

春日

- 1 のどかなる 日にこぼれてや うかぶらむ
まさごながるゝ 春の川岸

◇ 【訳】日の光のなか、川岸の砂土が崩れては、浮かんでいるの

だろうか。真砂が光ながら、春の川をのどかに流れていく。

- 清原言道 言道の本姓は清原。天武天皇第三皇子舎人親王の子孫であることを『清原姓大隈氏系譜』(九州大学蔵)に、自ら記している。

- 『戊午集』・第二では、第五句は「春川の岸」とある。

- こぼれて 崩れ欠け落ちて。壊れて。

帰雁

- 2 かへる雁 帰りて春も さびしきに
わらはのひろふ 小田のこぼれ羽

◇ 【訳】冬の間、慣れ親しんだ雁が去っていくだけでもさびしいのに、子供たちが、田にこぼれ落ちた羽を拾っているのを見るにつけ、ますます名残惜しい気持ちがつゆる。

- 『壬生集』にある。

- かへる雁 春になって北国に帰ってしまう雁。

- 小田 田。「小」は接頭語。

- こぼれ羽 雁の抜け羽。

鶯

- 3 いやたかく なるかときけば 鶯の
この下音にも ねをかへてなく

◇ 【訳】鶯が、いよいよ空高く飛んで行って鳴くかとおもうと、

次の瞬間には木の下に移動し、鳴き声の音色を変えて鳴くよ。

- 『今橋集』下にある。『甲辰集』では、二句以下「なるかと思へばさらにまたこの下音なるいまのひとこゑ」とある。

- この下音 木の下音。木の下で鳴く声。

春の鶯の活発な動きと、その瞬間瞬間の鳴き声を捉えた。

春雪

- 4 花もまた かくさかむとの 程みせに
積もるか枝の はつはるの雪

◇ 【訳】花が、またこういう風に咲くだろうとその様子を私に見せるための桜の枝に積もるのだろうか。初春の雪は。

- 『戊午集』第五。題「早春雪」、五句「春の白雪」を「初春の雪」と訂している。

○ 程みせに このような様子だということを見せるために。「程みせて」という言葉は、以前にもあるが、「程みせに」は言道独特の表現。春を待ちわびる作者の心情を背景に、花かとも見える春雪を表現した。

梅

- 5 うめのはな さけるやどさへ とざしけり
をざゝの里の 春の朝北

◇ 【訳】梅の花が咲いている家の戸までも閉め切っているよ。小笹の里にはるが来たとは言っても、朝吹く北風が寒いからか。

○ 『戊午集』第四、五句「けさの朝北」を「春の朝北」と訂している。

○ をぎの里 現在の中央区小笹。この近くに、言道門下の野村望東尼の住む向陵がある。

○ 朝北 朝吹く北風。「朝北の出で来ぬ先にはよ曳け」(『土佐日記』)などの用例がある。

水辺梅

6 川水も そなたによりて ながれゆく
うめのこかげの なつかしきかな

◇ 【訳】わたしばかりでなく、川の水までもがそちらへ近寄って流れていく。その梅の木陰にころひかれることだなあ。

○ 『甲辰集』五句「なつかしげなる」とある。

○ なつかしき ころろ惹かれる

荒村梅

7 さと人は さかりもめでず さくうめも
あれたるまがき 草むらのうち

◇ 【訳】村は荒廃し、梅の盛りを愛賞するひとたちもない。それでも荒れ果てた籬の草むらの中に咲く梅よ。

○ 『庚戌集』題「梅」。

○ まがき 竹、芝などで粗く組んだ垣。

8 ちりしける こほりもとけて 梅の花
所もかへず うかびぬぬるかな

◇ 【訳】梅の花が散り池の一面に敷きつめられている。池の水は解けたけれど、梅の花びらはよそに流れてもゆかず、浮かんでいるなあ。

○ 『戊午集』巻四、五句「浮くかむ池水」

里霞

9 けさみれば なびくかすみの おのれから
かゝげて見する たか宮のさと

◇ 【訳】今朝見るとたなびく霞が、まるで自分自身を巻き上げて見せているようだ、高宮の里の風景を。

○ 『戊午集』巻一「おのれからなびく霞のかゝげてもとり居見せたるすみよしの郷」朱で五句右傍らに「高宮」と未定稿のまま残す。

○ かゝげて すだれを揚げて。『白氏文集』や『枕草子』の「香炉峰の雪は簾をかかげて看る」を下敷きにして、霞が次第に晴れて視界が広がっていく様子を、あたかも霞自身が自分を巻き上げて景色を見せてくれているようだと言人法で詠んだ。「高宮」の「高」と「すだれ」縁語。

○ 高宮の里 現在の福岡市南区高宮。「高宮」の「宮」から「帳り」を想起する。言道の居所、今泉の「ささのや」からの眺めは、高宮が見え、遠くには宝満山やその連山が見えた。『ひとりごち』に「己が家せまくいやしきはいふも更なれど、山野凡そ十里あまりの眺望ありて、丑寅より未申までよく見え、橋も

四つ五つ、行く人なども見え、月によく、雪によければ、随分の美観なる」とあり自慢の眺望であった。

春夢

10 おもしろき うめの下枝の 見えこしを
折りしやしらず さむるゆめ哉

◇ 【訳】 枝ぶりのみごとな梅の下枝が向こうに見えていたのを、折り取ったのかどうかわからないままに、覚めた夢よ。

○ 『甲辰集』 四句「をりしやしらず」を「をりしやしらず」と訂す。

○ 折しやしらず 梅の花を愛してやまない作者の夢の中までも、折り取ってしまおうとする自分にはっとして驚いている。まどろみの中で、折ったのだろうか、いや花を折り取らなかったのかと。

11 まどろめば 野をちかづけて まくらへに
あるこゝちする すみれさわらび

◇ 【訳】 うたた寝をすると、野原を近づけてすみれや蕨が枕のあたりに生えているような気持がするよ。

○ 『戊午集』 卷三、二句「野を近づけて」を、「野へ近づきて」、四句五句「すみれなづなもあるこゝちかな」を「あるこゝちするつくづくしかな」と訂する。

○ 野を近づけて 表現に発想の斬新さがある。幻想的で自然と溶け合った夢中の構図。初稿「野を近づけて」を、『戊午集』では、「野へ近づきて」と訂するが、結局『草徑集』では、最終

的に初稿の「野を近づけて」に戻した。添削後に再び揺れた跡がわかる。

12 くらき夜は をちのうめが枝 おもはずも
ふせやのまどに きぬる香ぞする

◇ 【訳】 暗い夜は、思いがけないことに遠くの梅の枝が、粗末な我が家の窓に近寄って来たのではないかとおもうほど、梅の香りがする。

○ 『甲辰集』 二句以下「をちのうめがかねやどにもきぬるばかりに」ほひぬるかな」を本集で訂する。

○ をち 遠方。

○ ふせや 臥屋。粗末な家。

つまき

13 きられつる こともおぼえず 爪木さへ
このめ春には あふこゝちかな

◇ 【訳】 爪木までもが春に出逢った気になって新芽が萌え出ているよ。

○ 『甲辰集』

○ 爪木。薪にするための木の枝。

○ このめ春 木の芽春。「春」に「張る」(木の芽が萌え出る意)を掛ける。

○ あふこゝち 逢った気持ち。

○ 【参考】 「霞立ち木の芽も春の雪降れば花なき里も花ぞ散りける」古今集・春上・紀貫之

二月

14 になはれて ゆく梅さへも さかりなる
みやこの春の きさらぎのそら

◇ 【訳】 人に担がれて行く梅の木までも花盛りな京の春の二月の空よ。

○ 『戊午集』巻一、五句「みやこの春の」

○ 二句「さへ」で、街中の梅が花盛りなのはもとよりの意を暗示している。

○ みやこ 京の街。

折椿

15 うつろはぬ いろのみ見せて 玉椿
こぼるゝ花を 折らせつるかな

◇ 【訳】 永遠に焦ることはない色だけを見せて、美しい椿は私にこぼれ落ちるその花を折らせたよ。

○ 『甲辰集』詞書「椿」。

○ うつろはぬ色 あせることのない色。

○ 玉椿 「玉」は美称の接頭語。莊子「逍遙遊」の八千歳の大椿の故事から、長寿を保つ木として歌に詠まれた。

○ こぼるゝ花 ほろぼろと落ちる花。「こぼるゝ」は「玉」の縁語。

ひばり

16 人にのみ 子をおもはせて 夕ひばり
うはのそらには いかでなくらむ

◇ 【訳】 人にばかり子ひばりのことを心配させておいて、どうして夕方の雲雀は心も上の空で、空高く鳴いているのだろうか。

○ 『庚戌集』三句以下「夕ひばりいかでおちこぬみそらなるらむ」を「なくひばりいまだおちこぬ夕ぐれの空」と訂する。

○ うはのそら 上空の意に心の落ち着かない状態の意を掛ける。

春日

17 はしゐして 身を任せたる めねぶりを
こゝろえがおに 照す春日

◇ 【訳】 縁先に座わり眠気に身を任せて、こっくりこっくり居眠りしているところを、さもわかっているかのように照らす春日よ。

○ 『戊午集』巻二。

○ はしゐ 端居。縁先に座ること。室町時代あたりから見える歌語でとくに近世和歌に多く出てくる。

○ めねぶり 居眠り。普通和歌では詠まれない語。言道にはほかにも用例がある。

○ こゝろえがお 心得顔。心得てるかのようにの意の擬人法。言道が得意とする表現。

土筆

18 あめふれば ながるゝ庭の 水よりも
かしら出いでたる つくぐし哉

◇ 【訳】 雨が降ると庭にあふれて流れる水より上に、どうにか頭を出している土筆よ。

○ 『甲辰集』

○ つくぐし つくしの異名。つくしの頭だけがぼつぼつ見えて
いるのをけなげに思つて詠んだ。「わらび。つくぐし、をか
しき籠に入れて」(源氏物語・早蕨)。

きどす

19 春きては めづらしき野の きどすかな
その二声を いくこゑもせよ

◇【訳】春となると、珍しい野の雉がいるではないか。「けん、け
ーん」という二声の鳴き声を聞きたいから、何度でも鳴いてく
れ。

○ 『甲辰集』二句、三句「いとめづらしき雉子哉」。

○ きどす 雉子の古名。

○ 二声 雉子の雄は三月から七月にかけての繁殖期に「けん、け
ーん」と二声に鳴く。

野辺行人

20 うちわたす をちかた人の 道おそく

ゆきはつまじき 野のけしき哉

◇【訳】ずっと遠くを見渡すと、遠方の人は歩みがゆっくりと見
えて、行き尽くせないのではと思うほど広々とした野の景色で
あるよ。

○ 『甲辰集』題「行人」

○ をちかた 遠方。

○ 【参考】「うちわたすをちかた人にも申すわれそのそこに白く
咲けるは何の花ぞも」(古今和歌集・旋頭歌・読み人知らず)

わらび

21 こゝにもと 人にいふまに さわらびの
ありかうしなふ 春のゝべかな

◇【訳】ここにもあるよと人に教えて目を離れたその際に、蕨の
ありかがわからなくなり見失う。そんな春の野原。

○ 『甲辰集』四句「ありかわする」と

○ のどかな春の野原で、だれもが経験するちよつとした普段の風
景や動作を、和歌に切り取る感覚に発想の斬新さがある。

野外小流

22 ましみずの ほそきながれば 居ながらも

手をひたすらに なつかしげなる

◇【訳】湧き出てくる清水の細い流れに、その場で即座に手を浸
すと、ひたすらになつかしい感覚がよみがえる。

○ 『戊午集』卷六、題「小流」

○ 真清水 湧き出てくる冷たい水。

○ 手をひたすらに 手を「浸す」と「ひたすら」の掛詞。

蝶

23 いへのうちを おのが野にして とぶ蝶は

野をいへにする われ故そかし

◇【訳】私の家の中を自分の住みかの野原と見立てて、蝶が自由
に飛んでいるのは、野原と隔てがないような粗末な家に住んで
いるがゆえなのだなあ。

○ 『戊午集』卷四、四句「野をいへとする」

- おのが野にして 自宅を、蝶は自分のすみかの野とみなして。自宅の中に迷い込んできた蝶と自分を一体化させている。
- 野をいへにする 言道の生き方を示唆する句。

春雨

- 24 春さめの こそめは土に 落ちもあへず
そらのものにて みだれぬるかな

◇ 【訳】春雨のあまりにこまかくて地面までは届かずに、そらのものとして空中で彷徨い乱れて消えてしまったのだなあ。

- 『庚戌集』題「春雨細雨」、四句以下「風に乱れていつまでとなし」を「そらのものにて乱れぬる哉」と訂する。

- 25 たわらはの もの乞^(こ)ことも ことわりに
さびしさながき 春雨の空

◇ 【訳】幼い子供は外にも出られず、退屈してものをせがむのも道理で、寂しい長雨が続くゆえに、心楽しくない春雨の空であるよ。

- 『戊午集』巻四、三句以下「わりなきにさびしき春の長雨のそら」、「春の長」の傍に「けふのはる」と朱書。
- たはらは 「た」は接頭語。童。幼い子供。
- 【参考】「ふりにし媪にしてやかくばかり恋に沈まむたわらはのごと」万葉集・巻二・石川郎女

- 26 はるさめの こそめさびしみ ひさびさく
ふるに音せぬ タぐれの宿

◇ 【訳】細かい春雨が音もなくふる夕ぐれは物寂しいので、酒でも飲もうと瓢を振ってはみるがそれも音がしない夕暮れの家だなあ。

- 『庚戌集』
- さびしみ 寂しいので。
- 瓢 ひさご。酒を入れる容器。
- ふるに音せぬ 「ふる」は「振る」と「降る」の掛詞。「音」は、「春雨」の降る音と瓢を「振る」音の意。
- 宿 屋戸。我が家。

- 27 もる雨の もるやいづこと 火ともせば
ぬるがうへにも きぬる玉水

雨漏

◇ 【訳】雨漏りはどこかと思って灯をとすと、寝ている布団の上にも滴り落ちる雨だれであるよ。

- 『戊午集』巻四。
- ぬるがうへ ぬるは、寝る。寝ている布団の上。
- 玉水 雨だれ。
- 「もる」「もる」「ぬる」「きぬる」とリズムミカルに繰り返して間断なく落ちる雨水の様子を加味した。わびしい雨漏りの滴り落ちるしずくを歌語「玉水」で美しさをも表現した。「もるやいずこ」と実際口に出しているようなリアル感がある。

春雨晴

- 28 たまさかに はれまもあれど 春雨の
猶ふりたらぬ くものいろ哉

◇ 【訳】稀には晴れ間もあるが、春雨はやはり十分に降り足らないようだと思わせる暗い雲の色だなあ。

○ 『戊午集』巻二、題「雨すくなし」「時のまにはれゆく雨のけしき哉さばかりにてもふりやたるらむ」

29 つれごとく わびしかりつる 雨はれて

いけのおもさへ ゑめるさど波

◇ 【訳】退屈で気のまぎれることもなく過ごしていた。長雨が晴れて、池までも表面にさざ波が立ち、微笑んでいる表情に見える。

○ 『戊午集』巻二、題「雨後池」一句「ひさごとく」

○ 雨後のわが心が投影されているかの如くに擬人法で詠む。

花のうた

30 ちるなげき のちにしあれば 今のまを

たのしましめて 花やあるらむ

◇ 【訳】いつかは必ずちるといふ嘆きが後にあるからこそ、今のこのひと時をたのしませている花があるのだろうか。

○ 『戊午集』巻三、題「花」。

○ たのしましめて 見る人を楽しませて。

待花

31 まちわたる さくらのこのめ 欺きて

花めかしくも ふむむころかな

◇ 【訳】桜の花が咲くのを待っていたのに、葉となる芽が、いかにも花の蕾のように、ふくらむころだなあ。

○ 『戊午集』巻五、三句「ふむみぬるかな」を「ふむむ枝かな」と訂す。

○ まちわたる ずっと待ち続ける。

○ ふむむ 膨らむ。「含、フクム、クム、フム」(『名義抄』)

○ 【参考】「卯の花の咲く月たちぬ霍公鳥なきとよめよふふみたりとも」(『万葉集』巻十八・大伴家持)

雨中待花

32 咲きぬべき 花はさかずて あめふれば

雨をまちえて 見がほなるかな

◇ 【訳】今にも咲きそうな花はなかなか咲かなくて、待ってもいない雨がふってきたので、あたかも待ち望んでいた雨をやっと見ることができたようだ。

○ 『甲辰集』、題「待花」、一句「なつかしき」を「さきぬべき」、五句「見がほなる哉」を「わが見かほなる」と訂。

○ 見がほ いかにも見ているという様子。

柳上微風

33 風なしと見ゆるけさだに 青柳の

ころそなたに 糸はよりけり

◇ 【訳】風は吹いていないと見える今朝でさえ、青柳の心はそちらへひかれるからか、糸のような垂れ枝は、ねじれながらかすかな風のほうへよりそっていくよ。

- 『戊午集』巻二、一句二句「けさはまだ風もふかねど」五句「よるけしきかな」
- 糸 青柳の垂れ枝。
- よりけり 「寄り」と「蹉」をかける。

朝待花

- 34 さきぬるか まだかとおもへば 朝戸さへ
ひらきかねても 見つる花かな

◇ 【訳】もう咲いただろうか、まだだろうかと、心急ぎ、朝の雨戸をすっかり明けきらぬうちに見る花だよ。

- 『戊午集』巻五、題「待花」五句「みるさくらかな」

- 朝戸 朝起き出でて開ける雨戸。戸を開けるのももどかしく、早く花を見たいと焦る気持ち。

○ 【参考】「朝戸出の君が足結(あゆい)を濡らす露原 早く起き出でつつ我も裳裾濡らさな」「朝戸を早く開けそ味さはふ目が欲る君が今夜来ませる」『万葉集』巻十一

尋花

- 35 なかくくに みちまどはしぞ 花の山
ゆくさきにして 逢ふのちぎりは

◇ 【訳】行く先の花の山で、友と逢う約束は、かえって道を迷わせたよ。

- 『戊午集』巻三、二句「ともまどはしぞ」。

- なかくくに かえって。

- 道まどはしぞ 行く道を迷わすものだ。

- 逢ふのちぎり 人と逢う約束。

- 桜の山で人と待ち合わせたか、かえって、桜が、道を迷わせるものだ。

- 36 さく花を たづねてゆけば いつよりか
こそこし道に みちはなりきぬ

◇ 【訳】さく花を求めて歩いていくと、いつのまにか、その道は去年花見に来たことのある道になっていた。

- 初出『戊午集』巻二。

- 37 まよひては きのふの花の ありかにも
いたりかねたる 山のほそみち

◇ 【訳】迷ってしまった、昨日の花のあった場所にも到達することができない山の細道よ。

- 『戊午集』巻四、二句「見なれし花の」

- 38 そこなりと やすくうちいふ 山人の
道なかくに とほがのゝさと

◇ 【訳】すぐそこだよ、と、山人は簡単に言うが、なかなかそうはいかず、長々と道が遠い「とほがの」の里だなあ。

- 『戊午集』巻三。

- なかくくに 「なかなか」と「長々」を掛ける。

○ とほがのゝさと 福岡県朝倉あたりか。初出の稿本『戊午集』巻三では、「とほがのゝさと」の左傍書に「筑前上座郡」とある。現在の福岡県朝倉市上座上で、上座郡上寺町にある教念寺は、言道の先祖ゆかりの寺。

近郊の「通古賀」野の里あたりを、「とほこがん」「とほがんの」「とほがの」とも言った。

初花

- 39 はつはなの ひらくる見れば きのふまで
世の常ぼめを そらにせし哉

◇ 【訳】 実際に初花が開くのを見ると、昨日までのありきたりな

ほめ方では、いいかげんにしてしまっていたなあ。

- 『今橋集』 下、一句二句「はつ花にまこと向へば」

- 想像以上に素晴らしい初花への感動。

花下

- 40 だれよりも さくらがもとに ちかくゐて
さきへと 人をいはぬけふ哉

◇ 【訳】 自分は誰より桜の木の近くに座って、どうぞもつと前の

ほうへとは人に言わない今日だなあ。

- 『戊午集』 卷二。

- ゐて 居て。座って。

- さきへ もっと前のほうへどうぞ。人に席を譲る気持ち。

花下咏嘆

- 41 此春も おなじさくらの もとゐして
さらなることを また言はれけり

◇ 【訳】 今年の春も、去年と同じ桜の下に座して、また去年と同

じことをまた言ってしまった。

- 『戊午集』 卷二、一句「はるごとに」を「このはるも」と訂する。

- もとゐ 木の下に居て。「もと居」は、新しい表現。木の下に座って。言道の「もとゐ」や「まとゐ」は、ほとんどが団欒を兼ねた「歌の会合」、「歌の例会」を表す。

花友

- 42 こともなき さしむかひなる 花なれど
誰にもまさる 友どちぞかし

◇ 【訳】 言葉もなく向かい合う花だけれど、誰にも勝る友達同士

だよ。

- 『戊午集』 卷一。『甲辰集』、題「さくら」 四句「世にあるまじ

き」の傍らに「たれにもまさる」と朱書。

- こと 言葉。

- 友ぞかし 「かし」は強く念を押す助詞。友達だよ。

軒花

- 43 われからの 見なしのみに は あらじかし
軒端の桜 よそにまさるは

◇ 【訳】 私の思い込みだけではないだろう。我が家の軒端の桜

が、他の場所の桜より優っているというのは。

- 『戊午集』 卷一、四句「軒端の花の」

- われからの見なし 自分の思い込み

夜花

- 44 くらき夜も かくこそあかせ 桜花

そこにはありと おもふばかりに

◇ 【訳】 暗い夜も桜の下でこうやって夜を明かすよ。見えなくとも、そこには桜花があるという思いがあるからこそ。

○ 『庚戌集』、題「夜桜」二句「さてこそあかせ」

○ 桜を愛してやまない言道の桜への強い思い入れが見える。

春山遊行

45 花見つゝ 山をめぐりて いくたびも

おなじ所の おもしろきかな

◇ 【訳】 何度も桜の花を見ながら、山をめぐりめぐりて行くが、やはり同じ場所がおもしろいなあ。

○ 『庚戌集』題「春山行路」

○ おなじ所の やはりお気に入り場所は、いつものあのおなじ場所。

名所花

46 人言に まさるながたの 桜花

めでひろめても いふかと思へば

◇ 【訳】 人が言っていたよりも、さらに優って素晴らしい長田の桜よ。人は、実際以上にほめて宣伝していると思つたが、それ以上だった。

○ 『戊午集』巻三、二句三句「まさるつしまの桜哉」

○ ながた 福岡県甘木市長田あたりか。

曙花

47 春の夜の あげがたくらき 野へにきて

よく見えもせぬ 桜めでかな

◇ 【訳】 春の夜明け方のまだほの暗い野辺に来て、よく見えもしない桜を愛でているよ。

○ 『戊午集』巻四、題「野夜花」四句「まだ見えもせぬ」

○ よく見えもせぬ 明るくなるのを待ちきれず、暗い時から待っている心情を醸し出している。

○ 桜めで 桜を賞美すること。日本書紀歌謡に初出の「桜のめで」という言葉をさらに縮めたか。

山桜

48 さくらさく 山のすそのゝ あさぼらけ

まこと画にとて 画にまさりけり

◇ 【訳】 桜が咲いている山のすそ野の、ほのかに夜が明けはじめる頃は、ほんとうに絵のようだ、いや、絵より素晴らしいなあ。

○ 『戊午集』巻一、題「落花」一句三句「さくら散る山下かげのあさぢはら」を「さくらさく山のすそ野のあさぼらけ」と訂する。

○ あさぼらけ 夜明け。物がほのかに見えるころ。

49 むかしより なにとならへる 花はならむ

荒山さくら あらゝげもなし

◇ 【訳】 むかしから何に学んだ花なのだろうか。人里離れた寂しい荒山に咲く桜なのに、荒々しい様子もない。

○ 『戊午集』卷四、題「山桜」一句三句「なにゝかもならひて花のさけるらむ」左傍書「むかしよりなにゝならへるはなにゝらむ」

○ 荒山さくら 人里離れた、人を寄せ付けない険しい山に咲く桜。

○ 【参考】「道もなき荒山桜目にのみしうつくしみ見て折りがてぬかも」(悠然院様御詠草)

春川

50 あさきせに まろびくくて ながれ来る
枝もさくらの 花さかりかな

◇ 【訳】浅瀬を転がりながら流れてくる桜の枝でさえも花が見事に咲いているよ。

○ 『戊午集』卷二、題「花下流下」三句「流れゆく」

○ まろび ころがって。

思夜花

51 たゞひとへ まどのへだての ふし所
こゝにぬるとは 花やしるらむ

◇ 【訳】ほんの一重の窓が桜と隔てる私の寝所。花に近くなるよ
うにと思つて、ここに寝ているとは、花は知っているのだろうか。

○ 『戊午集』卷六、題「夜花」一句二句「一重なる窓のこなたの」を「窓のへだての」と訂、五句「花ぞしるらむ」。

○ 参考「かた時もたちはなれ憂き桜花さしへだてゝも寝る夜のまかな」(今橋集下)

家桜

52 たがさとに あるかしらねど ふたつなき
あが仏なる いへさくら哉

◇ 誰かの里にはあるかどうか知らないが、我が家の桜は、この世に二つとない大事な仏様であるよ。うちの家桜は。

○ 『戊午集』卷三、題「庭さくら」を「家さくら」五句「にはさくらかな」を「家さくらかな」と訂。今橋集下、「こころざしあさき見なしかしらねどもあが仏なるには桜哉」の一句二句傍らに「たがさとにあるかしらねど二つなき」と訂、左下に「別冊のうたくらぶべし」と自注。

○ あが仏 吾が仏。大切なもの。

○ 家桜 人家の庭の桜。山桜に対する里桜。

栽花

53 わかくして うゑつるからに さくら花
今よりといはゞ 無跡ぞかし

◇ 【訳】若い時に植えたから花が咲いたが、この桜を今から植えるとすれば、花が咲くのは自分の死後のことだろうよ。

○ 『戊午集』卷二、一句「わかき時」を「若くして」と訂。

○ さくら花 「咲く」と「桜」をかける。

一木花

54 まどろめば よりそふねやの 柱さへ
一木のはなの もとこゝちする

◇ 【訳】 うたたねをすると、もたれかかっている寝所の柱でさえ、一本の桜の下にいるきもちがするよ。

○ 『甲辰集』、題「柱」、四句「一木の花のこゝちこそすれ」を「花の一木のもとこゝち」と訂するが、『草径集』において成稿のごとく推敲。

○ ねやの柱 寝所の柱。

○ もとこゝち 木の下に居る感覚。気持ち。和歌番号530、554参照。

垂桜落下

55 いとながら うち任せても ある花を

えだよりはなつ はるの山風

◇ 【訳】 細くたよりない糸についたまま、それでも身を任せている花なのに、それを枝から引き離す春の山風であるよ。

○ 『戊午集』巻三。

○ 枝垂桜 糸桜ともいう。

○ 糸 細い枝の例え。

(続く)

注

一) 拙稿「大隈言道自筆資料『自詠集中抄』小林重治家集」九州情報大学研究論集巻10(1918年)参照。

二) 『布留散東・はちすの露・草径集・志濃夫廻舎歌集』(明治書院2007年)の拙稿「草径集」参照。

原本に即した翻字に訂し、もとの和歌の原形に戻れるように便宜をはかった。また、現代語訳と新たな箋註を充実させ和歌解釈の一助となるようにした。

三) 『草径集』は、上中下三巻三冊(東大、九大、国会、内閣、住吉、竹柏などに現存する)であるが、大阪府立大学学術情報センター蔵本(旧 大阪女子大学付属図書館蔵本)は、上中下三巻合綴。一冊。薄様。

また、大阪市立中央図書館蔵本は、三巻本の包み紙が現存しており、包み紙には「大隈言道大人詠草 草径集 初編 池萍堂蔵版」とある。

四) 拙稿「大隈言道研究V 歌論『ひとりごち』『こぞのちり』」

言道の修学過程(上)」九州情報大学研究論集巻20(2018年)参照。

拙稿「大隈言道研究VI 歌論『ひとりごち』『こぞのちり』」

言道の修学過程(下)」九州情報大学研究論集巻21(2019年)参照。